恩師訪問

佐藤義隆先生

アトリエで晴耕雨読 若者は広く世界を見よ

母校で勤務された方の近況をお伝えする「恩師訪問」。第十二回目の今回は美術教師として多くの生徒を育てられた佐藤義隆先生。六月五日㈮、同窓会館、羽城館にお越し頂き、広報委員高島清子（昭33卒）がお話を伺った。

最初に秋田高校に勤務された頃のことをお聞きしたいのですが

勤務したのは昭和五十九年四月から平成三年三月までの八年間でした。八年間で担任したのは昭和六十二年度一回だけでした。私は必要なことは言いましたが、他は生徒の自主性に任せていました。担任は自由人で夏休みなどはヨーロッパであったりと研修することが多かったのですが、それでも生徒はよく勉強しました。優秀なクラスで東大に四人も入りましたね。

この春、真山神社が行った男鹿三山お山駆けに参加した時、男性の方から「子どもの担任だった美術の先生ではありませんか」と声を掛けられびっくりしました。（写真の当時の生徒の「宿所届」などきちんと保存されており、「自由人」とおっしゃりながら生徒の指導振りが伺われた）

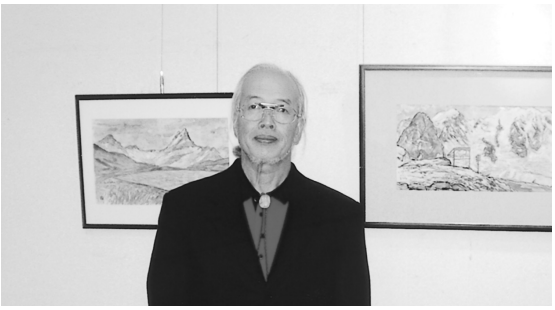
秋高での忘れがたい思い出をお聞かせ下さい。

あの当時まだ旧校舎でした。小体育館の二階に職員室が移りやっと落ちついた頃、改築が始まりました。プレハブの仮校舎で授業の声がみな隣りに伝わり生徒も大変だったと思います。

また、熊が出てきたり、プールにカモシカがいたり、そんな時は校内放送で熊注意のアナウンスが繰り返され放課後の校外練習が中止になったりしました。それだけ自然が豊かだったのでしょうね。

また、校務分掌は応援委員会顧問で松岡正樹先生が部長、私は副部長で、あちこち歩いた記憶があります。校舎後の水道山の「水」と書いてある辺りで生徒は練習していました。どんなに大声を出しても周りに迷惑をかけることもなく良かったですよ。

また野球も強く甲子園にも行きました。進学校で甲子園出場は珍しがられ注目されました。また勤務した昭和五十九年は秋田でインターハイがあり、職員全員役員で私は庭球を担当しました。運動会も盛んで赤白黄紫の雲隊に別れて自主的に行っていてたいしたものでした。


昨年９月、秋田市のアトリオンで開いた「スイスアルプス展」の作品の前で

そうそう、太平山登山で蜂の大群に襲われた生徒を私の車で病院に連れて行ったこともありました。思い起こせばいろいろありましたね。

先生はどんなきっかけで美術の先生になられたのでしょうか。

小さい頃から絵は好きでしたが、大学での美術の教授の影響が大きいですね。油絵を描き、レンブラントの研究家で模写もしていました。文部省からの派遣でヨーロッパに行き、オランダ絵画に興味をお持ちでした。抽象画ではなく写実的なもの、基礎をちゃんとすべきだといつも言っていました。

その影響で私もヨーロッパには何回も行きました。美術館で本物を見て勉強してきました。特にギリシアが好きで十何回も行っています。日程を組まないで行って現地でバスに乗ってあちこち廻りました。夏休みが終わって二学期に入ることもあり生徒にも了承してもらって廻ったり、縛られず研修でき幸せでした。いい時代であったかもしれませんね。（ギリシア地方の地図を見せていただいたが蛍光ペンでぎっしりマークされぼろぼろだった。）

先生は現在どんな風にお過ごしでしょうか。

ここ七～八年、世界遺産の白神山地の山々から始め、東北の山や県内の山を歩いています。地元にいい所がいっぱいあり、自然に親しみ、健康にもいいし、スケッチもできて最高です、また、白神山地入口の能代市二ツ井町にアトリエがあり、週一回くらい行っています。周りの畑を耕したり晴耕雨読の生活で精神衛生上もいいし、充実した毎日です。また、創作の基礎をしっかりさせるために裸婦のモデルを描いています。これはかなりの年数になります。

今の秋高生にどんなことを望みますか。

進学のために全力を尽くすのは勿論大事ですが、将来何を目指すのかじっくり考えてほしい。目先のことだけでなく外国人と会ったり、外国に行ったり世界にも目を向けて広く将来を考えてほしい。自分の責任で旅行出来るようになって自分の目でしっかり確認して広く世界を見てほしい。各国で大事にしているもの、誇りにしているものをぜひ実際に見てほしい。若い時に触れて実感すれば得るものも多いはずです。